君とつばさ

交通遺児育英会機関紙

©平成21年7月15日発行
発行・財団法人交通遺児育英会
〒102- 東京都千代田区平河町2-6-1
0093（電話）03（3556）0771
（HP）http://www.kotsuiji.com

清水会長、中根理事長再任
新理事、監事決まる

財団法人交通遺児育英会は、5月25日の第1回臨時評議員会で、任期満了に伴う理事、監事を改選し、5人の理事（再任3人、新任2人）、2人の監事（再任、新任各1人）を選任した。

監　事

小栗　洋氏

理　事

横山　茂氏

理　事

田中　勲氏

その後、6月16日の第2回臨時理事会で、理事の互選により、会長に清水司理事、理事長に中根晃理事がそれぞれ選出された。3期目を迎えた清水会長は、就任にあたって、その抱負を次のように述べた。

「公益財団法人への移行をタイムリーにさせなければならず、いくつかのハードルの解消を積極的に図っていきたい。奨学事業は大切な事業であり、安定的な財政基盤づくりに尽力していきたく、また、見直すべきところは果敢に改善していきたい」

選任後の理事・監事　（敬称略・五十音順）

会長	清水　司（再任）	渡辺学園理事長、元早稲田大学総長
理事長	中根　晃（再任）	元実践女子大学教授、元都立梅ケ丘病院院長
専務理事	石橋　健一	（財）交通遺児育英会常勤役員、前（財）交通遺児育英会事務局長
理事	有田　順一	サイテック アイ（株）代表取締役会長、（株）シャローネ顧問
	安齋　省一	元全日本中学校長会会長、（財）交通遺児育英会元奨学生選考委員会委員・元評議員
	岡本　裕之	元全国高等学校長協会会長、（財）交通遺児育英会元奨学生選考委員会委員・元評議員
	小笠原和俊	（財）東海交通遺児を励ます会会長、大宝運輸株式会社代表取締役
	祐成　善次	（社）日本青年奉仕協会会長、（財）交通遺児育英会元評議員
	田中　勲（新任）	元（社）日本自動車工業会理事・事務局長
	土肥　寿員	公益財団法人公益法人協会常務理事、（財）交通遺児育英会元評議員
	花上　嘉成	（財）東武鉄道共助会東武博物館専務理事・館長
	前畑　安宏（再任）	元文部省生涯学習局長、（財）交通遺児育英会奨学生選考委員会委員長
	横山　茂（新任）	元全国専修学校各種学校総連合会事務局長、（財）交通遺児育英会奨学生選考委員会副委員長・元評議員
監事	小栗　洋（新任）	全国高等学校長協会事務局長、元同会会長、（財）交通遺児育英会元評議員、元奨学生選考委員会委員
	森井　通世（再任）	公認会計士、元中央青山監査法人代表社員

奨学生の皆さんへ

新たな出発
―人生の節目にあたっての決意を―

財団法人交通遺児育英会　理事長　中根　晃

人生にはいろいろと節目があります。高校生になったとき、大学生になったとき、ともに大きな節目です。学校での勉強の仕方も変わるし、昨日までとは違った、社会人としての行動が要請されます。

今年、節目を迎えた方、昨年、一昨年に節目を迎えた方もその当時を思い出してみて下さい。高校生の3年間は心の仕組みも大きく変わり、節度をもった振る舞いができるようになる年齢です。自分というものが分かってきてみずから進路を選び、今の自分を手にしたはずだと思います。

このような身体の内部からわき上がってくる元気を追い風に、勉強なり部活動なりに若さを燃焼させていくのが若者です。とはいっても、少なからぬ数の中学・高校生は何か思いつくと、そのまま実行してしまい、人生上の大失敗をしかねません。実生活の中でいくつかの選択肢を採しだし、行動に移る前に、それを思い浮かべるという形で心の黒板に書き出し、その中でベストと思われるものを選んで実行する、という手順を身につけてほしいし、大学生になれば社会人としてなければならないのに、ゲームを続けてしまったりなど、しなければならないことを後回しにしたりして後悔することもあるはずです。

後悔の芽を少しでも減らす感性をどう培っていくか、自分自身の考えを客観的に見ていくよう努めてください。自分の決めた目標に向かっての努力こそ若さの特権です。努力には迷いはつきものです。文豪ゲーテは悪魔メフィストフェレスの口を借りて「人は努力している限り迷う」と言っています。

夜、森の中で道に迷ったらどうしますか。焦れば焦るほど、同じ所をぐるぐる走りまわることになります。朝が来ない夜はないのです。朝になれば目の前に展望が開け、目的地にすぐ到達します。

人生での迷いも同じです。勉強がわからなくなって焦っているうちに意欲をなくしてしまうのではなく、自分の決めた方角にあるはずの将来の自分をしっかり見つめること、皆さんはこれができる年齢に達しているのです。

返還件数、コンビニ採用で大幅増
理事会、評議員会　20年度事業・決算報告を承認

財団法人交通遺児育英会は、6月16日、第2回臨時理事会と第81回評議員会、理事会を開き、平成20年度事業報告と決算報告を承認した。

奨学生数の推移　（各年度とも6月1日現在数）

	21年度	20年度	19年度
高校・高専	576人（146人）	639人（165人）	677人（189人）
大学・短大	664人（165人）	660人（145人）	677人（168人）
専修・各種	172人（ 68人）	174人（ 58人）	188人（ 63人）
計	1,412人（379人）	1,473人（368人）	1,542人（420人）

（　）内は本採用者数で内数

●事業報告

1　奨学生の採用

20年度の新規採用者数は、高校238人、大学190人、大学院12人、専修学校76人、各種学校4人で、前年度に比べ44人減の合計520人。一方、継続採用者数も同様に漸減し、貸与者総数は、前年度比69人減の1633人となった。

入学一時金の利用者は、258人で前年度比77人減だが、進学準備金利用者は84人で13人増。

この結果、20年度の奨学金、入学一時金、進学準備金の貸与総額は、前年度より7345万円減の10億6850万円だった。

2　奨学金の返還

返還金の総額は10億9849万円で、返還率は前年度から1・52％悪化した86・42％だった。

このようななか、コンビニからも返還可能なシステムを導入し、昨年10月から運用を開始。その結果、昨年同期と比べ返還件数は大きく増加し、返還金額も微増して、全体の落ち込みを下支えした。一方、増え続ける長期滞納案件には、電話催促および戸別訪問を実施。その結果155件の案件を解消したが、該当の9・7％にとどまった。

3　奨学生の補導

高校奨学生と保護者のつどいは、中国、四国、九州地区を対象に開催し、参加者は40家族103人、参加率は20・3％。相談会は、和歌山、北海道など5道府県で実施し、平均参加率は25・4％だった。

5年目を迎えた海外語学研修は、英国、カナダ、オーストラリアの3カ国に計34人を派遣した。

4　資金造成

寄付金収入は1億6500万円で、予算に6500万円の未達。要因は、大口寄付者がなかったことと景気急落の影響と考えられる。そのため、募金箱配布先の拡大、寄付手段の多様化、ホームページの活用などを考えている。

5　第2次長期事業計画の推進

公益法人制度改革への対応、旧運輸省からの自動車事故対策費補助金の早期返還対応など、第2次長期事業計画を作成した。

〔おことわり〕「奨学生Q&A」は休みます。

6　事業見直し懇談会開催

本会を取り巻く環境の著しい変化に対処するため、理事全員が参加する「事業見直し懇談会」を昨年10月に発足させ、海外語学研修、つどい、学生寮などについて意見交換がなされた。

●収支決算状況

事業活動収支差額は、主に遺贈等の大口寄付が減少したことにより、2300万円の赤字。投資活動収支差額は、奨学事業積立資産の取り崩し等により1億1500万円の黒字。財務活動収支差額は、国庫補助金の返還により1億3000万円の赤字となった。

この結果、当期収支差額は3800万円の赤字となった。

今年度の予約本採用379人

交通遺児育英会は、予約決定者の中で、今春、上級学校に入学した379人の本採用を決定し、6月1日付で通知した。

本採用者は、高校145人、高専・専攻科1人、大学151人、短大14人、専修学校64人、各種学校4人で、前年同期に比べ11人の増加となった。

内訳を学校種別に見ると、大きく減ったのが高校・高専の19人減。逆に増加したのが大学・短大の20人である。

2年以上の継続採用などを含めた奨学生の総数は、高校555人、高専・専攻科21人、大学630人、短大34人、専修164人、各種8人の計1412人。昨年同期に比べ61人減。

この結果、奨学生総数中、大学・短大が高校・高専を上回る傾向はさらに拡大し、88人も大学・短大生が多くなった。

毎年続く奨学生の減少には、交通事故死者数の減少、遺児家庭把握の困難化などが考えられる。本会では、支援を必要としている生徒・学生が経済的理由で修学を断念することのないようにPRに努める。なお、在学採用は現在も受け付け中で、いつでも申し込みできる。

こころ

奨学生のお母さんに関する報道を二つ紹介しよう。一つは、民放テレビのニュース番組で本会奨学生の家庭が放映されたこと▼昨年秋以降の急速な経済の落ち込みが、家計と奨学生にどのような影響を与えているかをテーマにしたもの。高校生3人を抱えた家計は、奨学金があってもやりくりは厳しい。進学には不安を感じ、「親としての支援は困難、判断は子どもたちに委ねる」とお母さんが淡々と述べておられたのが印象的だった▼もう一つは、本会の創立40周年を記念して発刊した単行本『お母さんただいま奮闘中』のこと。機関紙に連載された記事を編集したもので、大黒柱を失った42人のお母さんたちがいろいろな職業につき、子育てに専念している様子が読者の心を打つ内容だ。通信社から配信され、多くの新聞が掲載したことから問い合わせが続いている▼日ごろ仕事で、奨学生が高校や大学を退学する書類を多く目にする。つらく残念な気持ちにさせられる。授業についていけない、専修学校などに変更したい、授業料が払えないなどの理由が付されているが、悩んだ末の結論であり、複雑な要因が絡み合っているのであろう▼尊重すべき判断だとは思うが、しかし、せっかく努力をして入学し、高い学費を納付しているのだから、残りの数年を辛抱してほしいとの願いは強い。なによりも、進学のために一番奮闘してきたお母さんを悲しませることになるのだから。